

Story of PES

理想と現実の相克の50年

プロローグ「人間・石黒の原風景」

石黒隆敏は愛知県春日井市に生まれ、幼少期を戦時下で過ごした。第二次世界大戦中は保育園で学び、地元の小学校1年生の年に終戦を迎える。

2年次からは、戦時中は軍事工場として使用され、廃墟となっていた建物を校舎として再生利用した愛知学芸大学附属春日井小学校で学ぶ。もともとは岡崎市にあった同小学校が空襲で焼失し、春日井市に移転してきたのだった。石黒は地元の小学校から転校した21人の中の1人として、自然に親しみ育まれながら学ぶことになる。

基礎体力を培った5年間

この小学校における教育は、戦前の教育とは一変するものであるだけでなく、戦後にスタートしたほかの小学校の学校教育とも一線を画するものだった。児童と父兄と教師が一体となって、あらゆる物や機会を教材として活用し、自分たちで「教室を整え」「手作りされた教材で」「無から有を創り上げる」実践の場であった。

具体的には、校舎づくりをはじめ、春日井駅を見学して運動場に実際に駅舎をつくったり、いわば経営プロジェクトとなる学内農場経営・学内工場などがある。ユニークなところでは、旅行資金とするための鶏の飼育、子供銀行と宝くじ貯金というのもあった。

児童の数より教職員の方が多いほどで、画一的

でない教育が実践されていた。一人ずつ考え方が違っていいという教育方針からである。画一的でないから、通信簿というものも存在しなかった。

「考え方が違っていい」というこの教育による薫陶は、20年後アメリカに渡った際に実感する「多様性」と共鳴することになる。



愛知学芸大学附属春日井小学校

「発想から創意工夫、そして勇氣ある挑戦など、全ての基礎体力を培う機会となった小学校5年間であった」。石黒はこのように語る。

自然そのものを尊び、かつ教材とする実践教育や